

## 七夕短編集 2020 サンプル

従順ペットの発情生活

雨だ。

「わう……」

今日は七夕なのに。

——願い事があったのに。

最近、折坂はとても忙しい。前だったらちやんと一日三食ご飯を食べていたのに、今では  
皐月の餌を用意して、それでまたすぐ仕事に戻ってしまう。

それがもう、二週間近く続いている。

仕事のことは話さないで、どうして急にそんな風になったのかは全く分からない。でも、  
このままでは倒れてしまう。書斎のゴミ箱には栄養補給ゼリーと栄養ドリンクのゴミばかり  
で、身体が心配だった。

それでも皐月がクッションで丸まってうとうととしていれば、必ずブランケットを掛けてく  
れる。

そんなこと、しなくていいのに、と思う。

確かに風邪を引いてしまつては余計な世話を掛けてしまうことになるのだけれど、犬とは  
いえ、人間らしいこともできる。だから、別に大丈夫なのに。皐月のことよりも、自分のこ  
とを心配してほしい。

折坂は、一人だけのご主人様なのだ。

降り止まない雨を見ながら、ぼうつと折坂のことを考えていると背後で足音が聞こえた。

「わうっ！」

「ああ、皐月。ここにいたのか。うんちかなと思つて」

「わうう」

違うよ、と首を振り、折坂の足に身体を擦りつける。好き。大好き。その気持ちが伝わる  
ように。

「……ずっとかまってやれなくて……ああ、プリンがあるよ。おいで」

毎日すごく忙しくしているのに、プリンを買うことは覚えていてくれたのだ。そう思うと  
嬉しくて、でも申し訳なくて。

自分の存在が負担になっているんじゃないか、とか。

カローアミルク

「諒。ちよつと買い物に行つてくる」

「あ……はい」

きつと、仕事で必要なものが足りなくなったのだ。コピー用紙とかインクとか——いや、でもそれは全て、書齋にあった。普段なら「一緒に行こう」とか、忙しければ「すまないが買ってきてくれないか」と言ってくれるのに。

「すぐに帰るよ」

買い物——それは物ではなくサービスとか……？ だから篠崎が行かないといけない……？ いや、でもそんなサービスって何だ。病院なら病院と言うだろうし、美容室だって何だつて、「買い物」に行つてくるとは言わないだろう。

食事の後や廊下ですれ違つたときにくれるように、後頭部を撫でてからの額へのキス。それを受けて、玄関を出て行く篠崎を見送る。

(なんで……?)

どうしてどこに行くか教えてくれないのだろうか。言えないところなのだろうか。それとも言うまでもないと思つているのだろうか。

車の鍵は持つて行つた。だからコンビニではないだろう。もしかして気分転換にドライブにでも行つたとか——あり得なくはない。もともと篠崎は運転が好きだし……でもそれなら、どうして一緒に連れて行つてくれないのだろうか。

(邪魔……?)

安西はずつと家にいる。篠崎も家で仕事をしているので、安西が買い物でも行かない限りはずつと一緒。と言つても当然篠崎の仕事中に書齋に行くようなことはお茶の時間や急ぎの用事がない限りしないけれど、それでも同じ屋根の下にずっと二人きりというだけで息が詰まるのかもしれない。

(……たまには外に出た方がいいのかな……)

普段家から離れるのはそれこそ美容室とか買い物くらい。だから、たまには……パートに出るとか、図書館で本を読むとか、それくらいはした方がいいのかもしれない。お茶をしに行くとなるとお金がかかるから、その二つと散歩くらいしか浮かばないけれど。

一万一千文字弱です。

宜しくお願い致します。

goneone